●〈症例〉

十二指腸に陥入しball valve症候群を来した胃過形成性ポリープの1例

青松直撥* 中村雅憲 長谷川毅 青松敬補

青松記念病院／外科

*Corresponding author: hong_shim@yahoo.co.jp

〔Key Words〕 ball valve症候群, 十二指腸脱出

はじめに

胃内の腫瘍が十二指腸球部に脱出することは比較的稀である。これらのうち脱出により腹痛、嘔吐、腹部膨満を来す病態はball valve症候群と呼ばれる¹⁾。今回我々は十二指腸に陥入しball valve症候群を来した胃過形成性ポリープの1例を経験したので報告する。

症 例

患者：65歳，女性。

主訴：間歇的な食後の腹痛，嘔吐。

既往歴：特記事項なし。

現病歴：2012年10月中旬より食後の胃痛，嘔吐を認めるようになり，以後食事量を減らしていた。その後も食後の胃痛，胃重感，嘔気，嘔吐が改善しないため当院を受診された。

入院時現症：身長150cm，体重44kg，眼瞼結膜に貧血は認めず。腹部は平坦・軟で圧痛は認めなかった。

血液検査所見：Hb 11.7g/dlと軽度の貧血を認めたほかは，腫瘍マーカーを含め特記事項は認めなかった。

腹部単純CT検査：胃前庭部から十二指腸内腔にかけて腫瘍性病変を認めた(Fig. 1)。

上部内視鏡検査：胃前庭部大彎に茎を有するポリープが幽門輪を越え，十二指腸に陥入していた(Color 1)。内視鏡操作にて嵌頓を解除したところ，胃前庭部大彎に長い茎を有する約2.5cm大の山田Ⅳ型ポリープを認めた(Color 2-a)。生検ではGroup 1, hyperplastic polypと診断された。再陥頓の可能性もあり同日緊急入院となった。

入院後経過：上部内視鏡検査を施行，茎に留置スネアをかけ，ポリペクトミーを施行した(Color 2-b)。

切除標本：病変は太い茎を有する双頭状の25×20mmの山田Ⅳ型ポリープを呈していた。

病理組織学的検査：hyperplastic gastric foveolar polypであり(Fig. 2)，*H. pylori*陽性であった。

術後経過は良好で術後6日目に退院され，ポリペクトミー後は悪心，心窩部痛を来すこともなく，現在外

Fig. 1 CT image of the upper abdomen showing a tumor within the duodenal bulb.

Fig. 2 Histological findings were consistent with a hyperplastic gastric foveolar polyp.

来通院中である。

考 察

胃内の腫瘍が十二指腸球部に脱出することは比較的稀であるが，時に脱出による幽門閉塞で腹痛，嘔吐，腹部膨満を来すball valve症候群¹⁾を発症することがある。

林ら²⁾は十二指腸に脱出した胃腫瘍100例を集計しており，その内訳は癌(52%)，筋原性腫瘍(13%)，GIST(10%)，過形成性ポリープ(10%)などであった。発生部位は，十二指腸に近い幽門および幽門前庭部が約80%を占め，胃角部より口側に生じるものは比較的稀であるとされている。

その解除は，内視鏡で送気しながら胃大彎を伸展したり，処置具使用(鉗子・スネア・回収ネット・チューブ)が有効であるが，困難例は手術が行われている報告もある^{3,4)}。

一方，胃過形成性ポリープは，大きさが2 cm以上

の癌化率は5～8%とされている⁵⁾。癌化を疑う内視鏡所見として、腫瘍径の増大・形態変化・出血に加えて十二指腸脱出が挙げられ⁶⁾、速やかな切除が妥当であると思われる。

自験例は、サイズが約2.5cmあり、十二指腸脱出もみられていたことから、診断と治療を兼ねた内視鏡的ポリペクトミーを施行した。幸いポリープ内癌は認めず、現在まで症状の再燃は認めていない。

おわりに

十二指腸に陥入しball valve症候群を来した胃過形成性ポリープの1例を報告した。

なお、本論文の要旨は第86回日本内視鏡学会総会(2013年10月、東京)で発表した。

文 献

- 1) Hobbs WH, Cohen SE : Gastroduodenal invagination due to a submucous lipoma of the stomach. Am J Surg, 71 : 505—518, 1946.
- 2) 林 友樹, 宮田完志, 湯浅典博, 他 : Ball valve症候群を来した胃体部進行胃癌の1例. 日消外会誌, 42 : 478—482, 2009.
- 3) 青松直撥, 竹内一浩, 内間恭武, 他 : Ball valve症候群をきたした1型進行胃癌の1例. 日臨外会誌, 71(10) : 2607—2610, 2010.
- 4) 青松直撥, 内間恭武, 竹内一浩, 他 : 腹腔鏡補助下に切除しえた十二指腸球部に脱出したポリープ状早期胃癌の2例. 日内視鏡外会誌, 16 : 329—336, 2011.
- 5) 西田宏二, 森田秀祐, 阿座上聖史, 他 : 胃過形成性ポリープより発生し術前診断が困難であった胃型高分化型管状腺癌の1例. Gastroenterol Endosc, 50 : 3027—3032, 2008.
- 6) 森山友章, 佐々木亜希子, 関 浩孝, 他 : 十二指腸脱出を内視鏡で確認した有茎性胃腫瘍の2例. Prog Dig Endosc, 80 : 90—91, 2012.

〈カラーはp. 6に掲載〉

A case of hyperplastic polyp prolapsing into the duodenum, causing the ball valve syndrome

Naoki Aomatsu*   Masanori Nakamura
Tsuyoshi Hasegawa   Keiho Aomatsu

We report a case of hyperplastic polyp prolapsing into the duodenum, which caused the ball valve syndrome. A 65-year-old woman was admitted because of epigastric pain and vomiting after eating. CT of the upper abdomen showed a tumor within the duodenal bulb. Endoscopic examination revealed transpyloric prolapse caused by the type IV gastric polyp. The polyp was pushed back into the stomach. Polypectomy was performed. The tumor was 25×20 mm in size. Histological findings were consistent with a hyperplastic gastric foveolar polyp. After treatment, the patient's symptoms resolved. She has not shown any recurrence of the symptoms until now.

Department of Surgery, Aomatsu Memorial Hospital

*Corresponding author : hong_shim@yahoo.co.jp